

イギリス、ロンドンのRoyal College of Art (RCA、王立芸術大学院)、Innovation Design Engineering 学科の博士課程に所属している、吉本英樹です。現在の研究と学外活動の状況などをレポートします。

研究の進捗

博士課程の最終学年を迎えましたが、これまでの成果を論文にまとめる作業に、予定していたより長く時間をかけて臨むこととなりました。テーマは一貫していますが、より広範囲の参考文献を取り入れるため、この半年間はかなりの時間を読書と、論文のドラフトを書く作業に費やしました。特に産業革命以降のインダストリアルデザインの歴史を、自分のテーマに即してより深く洞察することと、関連する芸術分野、心理学、哲学の文献を読み込んでいます。純粋な工学とはアプローチが逆かもしれませんが、これまでの研究生活では、テーマを具体化する前に、まず何はともあれ手を動かし、実験をして、作品を作り、作品を展示して人に触れてもらって次のアイデアを得て、次の作品につなげるというプロセスを繰り返しながら、研究テーマ自体を「彫刻するように」徐々に具体化するということをして来ましたので、制作室から離れて机の上でひたすらに文献から知識を得る時間がむしろ最後になりました。言うならば、昨年までの期間は自分自身がデザイナーあるいはアーティストの立場であり、対照的に、現在は批評家の立場にあります。批評する対象は、自分自身です。つまり、自分が作って来たものについて、歴史と社会との関係の上で「語る」という作業です。デザインスクールの修士では、前者の立場に圧倒的にフォーカスしているようですが、博士課程では、この後者が前者以上に重要視されています。

カレッジで一般に勤められている時間配分に対して、私の場合は、結果的に前者の「作る」期間に少し多くの時間をかけすぎました。そのおかげで、作品は軒並み世界レベルの賞を受賞したり、世界トップの展示会に招待をされたり（また九月にはパリの世界トップ規模の展示会に招待されています）、成果のクオリティは自他共に認めるハイレベルなものになったのは確かですが、やはりそれだけではドクターと認められるには至らないということです。しっかりとそれを「語る」ことで、少なくともデザインとして成功しているこれらの成果を、さらにアカデミックにも成功させられるよう、引き続き頑張ります。

学外の活動

博士課程で制作した作品のビジネス的側面をカバーしているデザイン事務所「tangent」の活動ですが、こちらは非常に順調に進んでいます。博士課程を第一優先するために、今はかなりゆっくりしたペースで、本当に我々の今後にとって重要な案件しか受けないようにしていますが、フランスの世界トップブランドとのプロジェクトをローンチしたり、上に触れたように、九月のパリの展示会Maison et Objetに先方から招待をされたりと、確実に将来の道筋を作ることが出来ています。tangentはいわば博士課程の副産物ですが、同時に卒業後のキャリアの足固めになっています。